Ｒ５　１１月②研究会　参加者感想

これからの生活科の授業づくり，単元づくりにおけるヒントをたくさんいただきました。生活科という教科は，どのような教科なのかといった「本質」を常に頭に入れながら子供と学びを作っていくことの重要さを感じました。貴重な学びの時間を提供してくださりありがとうございました。
吉田先生の貴重なお話を拝聴でき、今回も学び多き時間となりました。若い方々を育てておられるこの会も毎回素晴らしいと感激しています。
若い先生方が真摯に学ぼうとされるお姿にとても刺激を受けました。また、吉田先生には自分が実践者の頃に大変お世話になり、厳しく温かくご指導賜ったことを思い出し、まさに生活科の原点にかえり、自分もこれからの人たちを導いていきたいと思いました。ありがとうございました。
吉田先生のおっしゃっていた本時目標に対する評価について考えました。子供が本時目標に対して、どのようなことができたのか、できなかったのか、そのためにどのようなプロセスがあったのかを評価する場面は、自己評価能力を育成することにつながりそうだと感じました。
２年生のおもちゃの実践をしたとき、古い電池がなくて困っていた子供が、その代用になるものを探し、トイレットペーパーの芯を使いました。それは素材遊びを十分にしていたので、乾電池の形状とトイレットペーパーの芯の形状が似ていることに気付いたことからの工夫でした。吉田先生が言われていた、渇きが出るくらいの塩梅で環境構成をすることの良さに共感しました。
子供にとって使う材料、使えそうな材料などが適度にあり、子供が、その量の減り具合が分かると、先生に伝えたり、自分で用意したりします。そのためには、子供一人一人が、それらの材料が、どこにあるのかが分かることで、子供の渇きが生じそうだと感じました。
環境構成も、様々な教育的支援も、正しい方法があるわけではなく、意図や目的が大切であり、目の前の子供たちの実態に応じて、その方法は多様に変化していくということを改めて感じました。「環境構成はどうしたら良いか」というような議論が、その学習の目標や、子供たちの実態を抜きに語られることがないようにしていきたいと感じました。